



[故郷]の記憶 : シュティフターの作品における[場所の感覚] (特集 : アーダルベルト・シュティフター)

松岡, 幸司

(Citation)

DA, 13:3-10

(Issue Date)

2018

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011275>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011275>



【故郷】の記憶

— シュティフターの作品における【場所の感覚】—

松岡幸司

はじめに：「場所の文学」

これまでの世界の歴史は、場所へと変化してゆく空間の歴史であると言える。最初に地球は形のない空間であった。そして人が定住することを通じて、様々な場所が創造された。¹

ビュエルは、人と【場所】との関係の歴史が世界の歴史であることを指摘している。【空間】が【場所】へと変わっていく、ということは、その空間が人間にとって特別な「意味を持つ空間＝【場所】」になることを意味している。この【場所】を創造・経験することにより、人間はアイデンティティを獲得していく。そこで生じるのが【場所の感覚】と言えるだろう。それゆえに環境文学は、「場所の文学」と言うことができる。

本報告は、【場所の感覚】という視点からシュティフターの作品を読み、そこに現れる【故郷】という【場所】に関する「記憶の継承」と「アイデンティティの獲得」について考察を行うものである。

I. 【場所の感覚】：空間、場所、居場所、故郷、そしてアイデンティティ

1) 【場所の感覚】²

人間は、必ずある【場所】に位置する存在であり、【場所】によって生それ自身が規定される。【場所の感覚】とは、人間が【場所】との関係においてアイデンティティを獲得、あるいは再認識する行為の中心にある感覚である。単なる土地や一地点としての場所とは違い、【場所】は自然環境のみならず、歴史や文化からも成り立つ複合空間、つまり人間の営みとは切り離すことができない空間として理解される。だからこそ【場所】が人間の生を支え、人間の帰属すべき空間となりうる。現代思想としてのエコロジーの視座から換言するとき、【場所】は人間とその活動をも組み入れた「生態系」を構成する。そして我々は、その生態系のすべての他者（動植物、地形、気象などを含む）を知覚することで【場所】を経験していき、記憶を形成する。そして【場所】という生態系の一部としての自己を知り、ひい

¹ ローレンス・ビュエル『環境批評の未来——環境危機と文学的想像力』伊藤昭子他訳、音羽書房鶴見書店、2007年、85頁（=Lawrence Buell: *The Future of Environmental Criticism. Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford: Blackwell, 2005, pp. 63-64）。下線は論者による。

² 生田省吾「覚醒する〈場所の感覚〉——人間と自然環境をめぐる現代日本の言説」、野田研一・結城正美編著『越境するトポス——環境文学論序説』彩流社、2004年、19-41頁所収、21-24頁参照。

ては「自分が誰であるのか」との認識にいたる。つまり自己のアイデンティティを獲得するのである。

2) 「空間」と「場所」、[居場所]そして「故郷」³

そもそも「場所」(the place / the place where you are)というのは、きわめて個人的な感覚によるものである。「場所」というものは、主体としての「私」の意識があって初めて意味を持つ。つまり「私」とのかかわりで形作られるネットワークの中の一地点である。それは「私」の存在する世界、言い換えればエコロジカルなネットワークとして成り立っているのである。その「場所」の共同体における(人間以外も含む)他者との関係の中で「私」はアイデンティティを持つようになる。そして自己を定義し、帰属性を持つ「居場所」(the place / the place where you belong)を獲得する。⁴

人間にとって、一番根源的な「場所」とは「故郷」である。「故郷」は、「私」が生まれた場所であり、「私」の根源的なアイデンティティを創出した「場所」である。

しかし、ドイツ文学で時折テーマとされる *heimatlos* (故郷喪失) のような状況が起こることは珍しいことではない。近い例で言えば、茨城・福島 of 居住者で「3.11」以後いまだに住んでいた土地に戻れない人々がそうである。その意味で、「3.11」の問題は、故郷喪失と、いかにして新たな「故郷」を見いだせるか、ということでもあろう。

故郷喪失者にとっては、「場所」としての「故郷」の回復は最も根本的な問題である。なぜならそれは、「自身のアイデンティティの回復・再創造・再獲得」を意味するからである。彼らがしなければならぬことは、ある「空間」を安定した[(居)場所]へと昇華し、エコロジカルな関係を構築しつつ、新たな「故郷」を見出すことである。しかしこれには計り知れない時間がかかることになる。なぜなら、先に述べたように「場所」、さらには「故郷」の創造は、歴史、すなわち「関係性の記憶」の形成と密接な関りがあるからだ。

今回の報告は、この「場所」としての「故郷」と「記憶」の形成が中心的なテーマとなる。

II. 『みかげ石』⁵: アイデンティティ、あるいは記憶の継承

1) 簡単なあらすじ

『みかげ石』(*Granit*, 1853) は、1853年に発表された作品集『石さまざま』(*Bunte Steine*, 1853)に収められた6編の作品のうちの最初の物語である。

³ 喜納育江『故郷』のトポロジー——場所と居場所の環境文学論』水声社、2011年、11-35頁参照。

⁴ 喜納は、現代社会において「場所」であるはずの空間にアイデンティティを見いだせずに「漂流する」者が、ある種の関係性のもとに「居場所」を探している、と指摘している(同上)。本来「場所」を持つべき空間に「居場所」を見出すことができず、根無し草のように漂流する者が自己を定義するための「場所」を探しているのである。仮に「居場所」を確保したとしても、それがすぐに「場所」になるわけではないことは、ここまで述べてきたことから明白である。

⁵ 今回参考にした翻訳では『花崗岩』と訳されているが、論者は地質学的な呼び名よりも通称でもある「みかげ石」の方が作品に合うと考えるので、本論では作品名を『みかげ石』とする。

語り手の実家の前に大きなみかげ石がある。そこから話は語り手の幼い頃の思い出に移る。ちょっとしたいたずらで母親に怒られた「私」を連れて、祖父は隣り村への散歩に出かける。その道中、祖父は故郷の様々なものを指さし、それにまつわる歴史や出来事を語っていく。それらは、目の前に広がる故郷の事物と共に記憶として「私」の中に蓄積されていく。

今回取り上げるのは、「私」と祖父が行った、隣り村を往復する散歩の部分である。

2) 散歩：[故郷] という [場所] の同定 (Identifikation) ⁶

この散歩において祖父は、道すがら遠くに、あるいは近くにあるものを指し示して「私」に名前を言わせる (zeigen: 指し示し)。それは、二次元的に見えるものだけではなく、山の向こうにあって実際には見えないものも含まれ、空間的な奥行きを伴う指し示しでもあった。そして個々の対象に関わる逸話や出来事を話し聞かせ、「覚えておきなさい」と繰り返して告げる (erzählen: 物語り)。

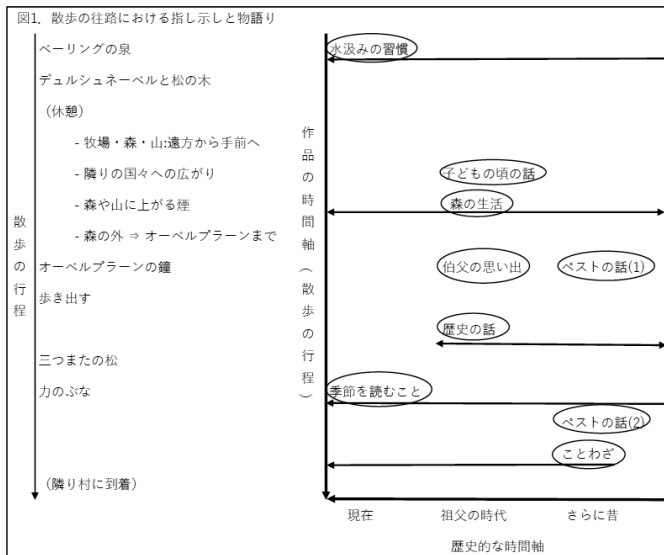
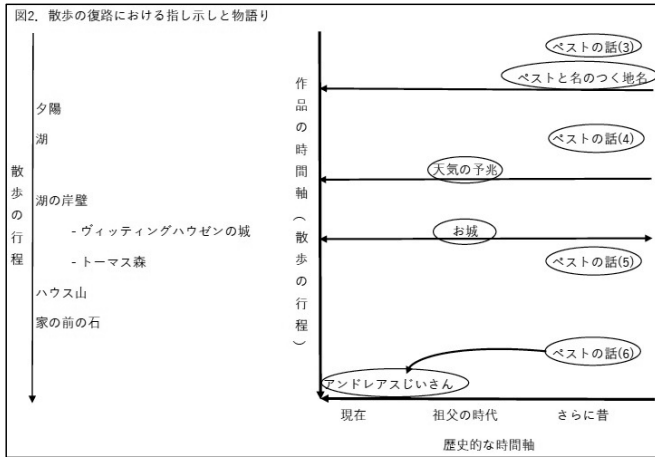


図1 左側では指し示した対象を、右側にはそれに関して物語られたことが歴史的な時間

⁶ 松岡幸司「記憶の奥行き——『みかげ石』における時間と空間」、磯崎康太郎編著『アーダルト・ベルト・シュティフター 1805/2005——イメージ・空間・記憶』日本独文学会研究叢書 043、2006年、1-8頁参照。

軸の中でどのような位置にあるのかを示した。例えば「力のぶな」(die Machtbuche)については、秋風がこの木の葉を落とすとすぐに冬が来て周囲は雪に覆われる、ということが述べられ、この木から季節の変化を読み取っているということが語られている。これは昔から受け継がれてきている習慣であり、歴史を通して行われてきたこととして考えられる。つまり、「力のぶな」という実際に目に映るものを指し示し、そのことについて物語ることで、現在の空間に歴史という時間的な奥行きが加わる。そうした奥行きを持つ時空間の情報(つまり記憶)が祖父から孫へ伝えられる、ということになる。

そして復路では、逆の順番に全てが現れるが、かつてこの地域を襲ったペストの話と、その当時に実際にあった少年と少女の話が中心となる(図2)。そして散歩の最後には、家の前にある「石」に腰かけて、事の発端となったピッチ売りの老人の話にいたる。



この散歩の間に語られることは、祖父の記憶であり、その土地の時間的・空間的・情報でもある。それは彼の先祖までさかのぼる内容であり、その意味ではこの土地、[故郷]の記憶の一部、と言うこともできるだろう。語られる「記憶の集積」は、時間的な順番、つまり歴史の経過の中ではばらばらに散らばっている。とはいえ、記憶というものには年表のように秩序だった順番によるのではなく、雑多なものとして収められているものである。

しかしここで語られる様々な物語には一つの指標がある。二人がたどる「道」から見える「順番」という指標である。無機質に並べられた年表や教室で教わるその土地の特徴ではなく、自らたどった歩みにそって伝えられた物語である。時系列で語られるのではなく、今、目にするものの順番に語られているのだ。それゆえ、時間的に過去と現在の間を頻りに行き来することはごく自然なことであり、それによって時間的な奥行きも当たり前なものとなる。その意味で、ここで語られた物語や情報、つまり祖父の記憶は、散歩という経験の上に成り立ったものと言えよう。だからこそ、「私」は、この道をたどる(再体

験する)度に、祖父の「記憶」を、つまりこの故郷という土地の記憶をたどる(再体験する)ことができるようになる。

3) 歴史と記憶の継承:[故郷]との一体化

そして「私」は、祖父の記憶を継承することで、[故郷]の記憶の奥行きを知ることになる。この「継承」は、歴史という知識の伝達ではない。祖父の記憶という経験の集積を、散歩という経験を通して受け継いでいくのである。故郷の道を歩くことで故郷の記憶を継承していくのである。そうして[故郷]の記憶は、「私」の中に経験と結びついて定着する。それにより「私」は[故郷]の記憶を担う者となり、[故郷]という総体に組み込まれていくことになる。この「継承」によって、[故郷]という[場所]は、空間的にも、時間的・歴史的連環の中でも「私」の存在を支える、アイデンティティを与える時空間となるのだ。

III. 『森ゆく人』: アイデンティティの創造/獲得

1) 簡単なあらすじ

第1章「森の小川のほとり」(Am Waldwasser): 語り手の幼い頃に故郷の森に移り住んでいた「森ゆく人」と呼ばれる老人ゲオルク。彼は土地の人々の中に住み、森番の子ジミと親子のような関係を築く。ジミが学びのためにその土地を離れると、ゲオルクも森の中へと消えていく。

第2章「森の傾斜地」(Am Waldhange): 北ドイツで生まれたゲオルクの半生。学びのために故郷を離れた後、両親を失った彼は、自らが好む孤独な日々を過ごす。次いで、彼と結婚することになるコローナ(エリーザベト)の半生。彼女も彼と同様に両親を失くし孤独な日々を過ごす。二人は、その孤独さゆえに惹かれ合い結婚する。何年も子どもに恵まれずに暮らす、お互いに子どもを得る努力をしよう、と話し合って離婚する。

第3章「森のはずれ」(Am Waldrande): その後ゲオルクは再婚子どもを得る。定住する場所を探す家族旅行の際にゲオルクはコローナと再会するが、彼女が結婚しなかったことを知り、後悔の念に襲われる。晩年の彼はボヘミアの森にやって来たところで、第1章の話につながる。

1847年に発表された『森ゆく人』(*Der Waldgänger*, 1847)は、それまでの作品が、雑誌版から改作されて短編集に入ったのとは違い、改作されずに残った珍しい作品である。シュティフターの作品の特徴もいえる作品冒頭の地誌描写は、この作品ではかなり長く、その作品構成の「いびつさ」もあって好ましい評価はされてこなかったのだが、実はそれこそがこの作品の隠れた構造を支えるものであるのだ。⁷

⁷ 松岡幸司「閉鎖世界における至福の Waldgang——『森ゆく人』の構造と解釈」『文学における自然描写の方向性——シュティフターに見られる自然のコンテクスト』名古屋大学学位論文、

2) 故郷の喪失から、アイデンティティを獲得する [場所] を求めるゲオルクの道行き

第1章のほぼ3分の1は、舞台となるボヘミア南部と上部オーストリアの精密な、時間的空間的奥行きを伴った地誌描写となっている。その描写は、先に述べた『みかげ石』の散歩における「指し示しと物語り」に似て、語り手の目に映るもの（あるいは目に映る山の向こうに隠れた土地：差し示し）と、それにまつわる出来事や慣習の説明（物語り）が中心となる。冗長ともいえるこの地誌描写により、プロローグともいえるこの部分で、読者はボヘミアの森を目の当たりにし、体験し、作品に、そしてその土地に引き込まれてしまう。

それからいつの間にか「森ゆく人」と呼ばれるゲオルクの晩年の話に入る。彼は、両親と共に暮らした家庭でも、最初の妻コローナとの生活においても、それが彼の本質であるかのように、他者との関係を持たない、ある種閉鎖された空間で生きてきた。その性質を等しく持っていたコローナとの生活において生じた離婚の引き金も、彼らの閉鎖性という性質を破った行為だった。森も山もない北ドイツの故郷を失い、コローナとの、閉鎖された [場所] の創造も失敗した彼は、この南ボヘミアの地で [居場所] を見つける。そして森番の息子ジミとの関係は、「おとうさんー息子」と呼び合うような関係にまで達する。

この地での彼をシュティフターは、「もはやこれ以上伸びない、人生の枯れ枝⁸」と表現し、彼がその「枯れ枝」を落とす「場所」を見いだせなかった、と述べている。

しかしゲオルクはジミという息子、つまり自身の「生」を引き継ぐ存在を得て、彼の [場所] を獲得する。そしてそこは、自分の「生」の終末である「枯れ枝」を落とす [場所] ともなる⁹。ジミと親子の（ような）関係となり、ジミを育て上げ、彼が遠くの町へ旅立っていった後、ゲオルクは森の中に消えていく。自分の「枯れ枝」を返すべき大地を得た彼は、ボヘミアの森という [場所] で大地に還る。この「枯れ枝」を落とす場所、つまり大地に還る場所は、「土から生まれ土に還る」という言葉のごとく、彼にとっては第二の [故郷] となった、とすることができるだろう。

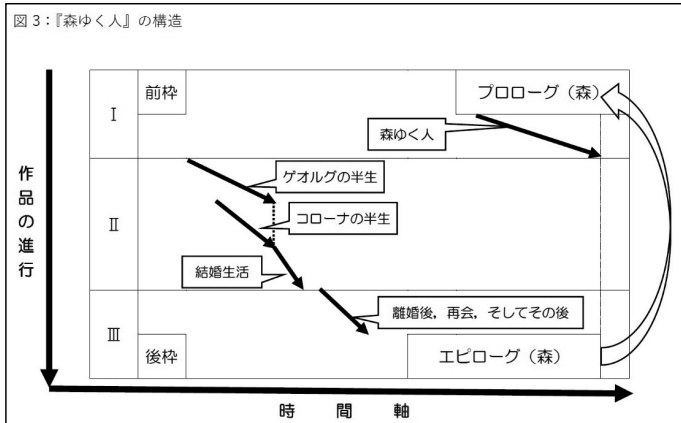
2002年、117-136頁参照（これは、以下の論文に加筆修正をしたものである。「閉鎖世界における至福のWaldgang——『森ゆく人』の構造と解釈』『信州短期大学紀要』第9巻第2号（1997）所収、72-83頁）。本論の『森ゆく人』に関する分析と合わせ、この作品の再評価をおこなっている。

⁸ 語り手は、ゲオルクがボヘミアの森に来た時の状況を次のように述べている。「若枝が力と若さに溢れて新しい大気に向かって成長し、青空や太陽や雲を望み、生れて来たもとの枝に戻ることがないとすれば、さしずめ彼はあとに残された枯れ枝 (der rückgelassene, verdorrte Ast) のような存在だった。」Adalbert Stifter: *Der Waldgänger*, in: *Bunte Steine und Erzählungen*, München: Winkler, 1990, S. 361-453, S. 452. (=アーダルベルト・シュティフター『森ゆく人』松村國隆訳、松籟社、2008年、9-129頁所収、128頁。下線は論者による。

⁹ ゲオルクにとってこの森の地が [場所] となった証拠の一つとして、ジミバウアー (Simmibauer) の所に住んでいた彼が、現地の慣習によって「ジミゲオルク」(Simmigeorg) と呼ばれるようになったことが挙げられる。つまりこの地の慣習で名づけられたことにより、土地の者になったと言えるからだ。Ebd., S. 381. (=同上34頁。)

3) 作品の構成と分析：森という「場所」の「故郷」化

作品自体は、変則的な「枠構造」を成しているが、その内側を見ると、循環構造を見出すことができる。図3は、この作品の進行と時間軸との関係である。



第1章では、語り手の語る作中の現在（前枠）から、彼の回想に移り、そこに「森ゆく人ゲオルク」の晩年が重なる。第2章になると、ゲオルクの生い立ちに時間が戻り、そこからコロナの半生と二人の結婚生活へと時系列に沿って第3章に進む。しかし第3章になると、ストーリーは再び「森ゆく人ゲオルク」の晩年に達する。ここで、ほんの数ページで作品が唐突とも言えなくはない終わり方をするので、ストーリーは行き場をなくし、時間軸として同じ地点となる第1章のプロローグの後に戻ってしまう。これによって、作品は、枠物語の枠の中で永遠の循環に入り、読者までもがそのループにはまりこむことになる。

この時間構成のループの中で、ゲオルクは、「枯れ枝」という己の「生」の最後をボヘミアの森の中に落として終わると考えられるが、その「生」はジミに継承され、人間の歴史の連環へとつながることになる。それは、この地に「枯れ枝」を落とすことで、この森林生態系の物質循環（ループ）に加わることを意味している。つまり作品構造自体が、ボヘミアの森という「場所」の生態学的な循環をも表しており、ゲオルクがその生態系の一部になり、関係性を持つことで、作品は、彼が「場所」を獲得する過程を描いたものにとらえることもできるのである。

ゲオルクは、自分の「枯れ枝」を森の中に落とすことで、「生」の連環、つまり人間の歴史の中に入ることができたのである。それによって彼は、森という「場所」、大地という「故郷」を見出し、生態学的な連鎖（「場所」）の中に自己のアイデンティティを獲得することができたのである。

IV. まとめ

『みかげ石』において「私」が祖父から継承する記憶、それは実は故郷の記憶の断片でもある。時間と空間が複雑に絡み合ったこの記憶を継承することは、実は故郷の記憶を持ち合わせる事、つまり故郷の記憶の担い手となることを意味している。それによって、「私」は故郷の一部となり、故郷の地はアイデンティティを与える「場所」としての「故郷」になる。この作品では、ある空間の記憶を継承することにより、同時にその空間の一部となる、ということが述べられている。そしてその空間が「場所」であった場合、空間的・時間的にその「場所」のネットワーク、エコロジカルなネットワークに組み込まれ、己のアイデンティティを獲得することになる。

かたや『森ゆく人』では、故郷を失ったゲオルクが、自分の「場所」を見つける人生という旅を続ける。そして晩年になって見つけた森の地で、「枯れ枝」となっていた彼は森という生態系の永遠の物質循環、つまり生の循環の中に加わる。彼はやっと「場所」を、そしてアイデンティティを獲得したのである。そしてジミや語り手、そしてその地の人々の記憶の一部となり、その森は彼のアイデンティティを形成する「故郷」となる。

どちらの作品にも、幼少から少年時代にかけてのシュティフターの体験がモチーフとしてちりばめられている。そこにはシュティフター自身の記憶も現れていると考えてよいだろう。言い換えれば、この二つの作品は、彼の「故郷」ボヘミアの記憶を集積した、いわば彼の記憶となっているのである。「故郷」という「場所」に対して抱く「場所の感覚」は、記憶を通した「故郷」との一体化を通して生じ、アイデンティティへとつながっていくものといえよう。